

実践報告

「歌と語りでつづる英語劇」を導入した中学生の
縦断的活動実践報告船田 まなみ¹⁾・執行 智子²⁾・カレイラ松崎順子³⁾A Longitudinal Study of English Play Production Involving Singing and Storytelling
at a Japanese Junior High School

Manami Funata, Tomoko Shigyo and Junko Matsuzaki Carreira

要 旨

本研究では、英語劇に歌やチャンツを盛り込み、さらに、劇の内容を深めるために調べ学習を組み込み開発した「歌と語りでつづる英語劇」の活動が、参加者のことばの気づきや活動への取り組みにどのように影響するのかを調べた。その結果、参加者たちの振り返りシートや事後アンケートから学年が上がるにつれて視点の違う気づきがあることがわかった。また、事後アンケートからは3年間通して参加した英語劇は「やりがいがあった」や、「ためになった」という答えが多く見られた。英語劇を通して英語の力がついたと感じた参加者や、自信につながったという意見もあった。さらに歴史的背景についての調べ学習を導入したことで、物語の背景知識が増え、内容理解が深まり、発表内容や発表自体にも影響を与えたことが明らかになった。

キーワード：中学生、英語劇、歌、背景知識、3年間繰り返し

1. はじめに

中学校学習指導要領には、英語の教材を選ぶ際について、「聞くこと、話すこと、読むこと、書くことなどのコミュニケーション能力を総合的に育成するため、実際の言語の使用場面や言語の働きに十分配慮」し、「生徒の発達の段階及び興味・関心に即して適切な題材を変化をもたせて取り上げる」（文科省, 2008, p.98）ことと記載されている。また、選択した教材は、「多様なものの見方や考え方を理解

し、公正な判断力を養い豊かな心情を育てるのに役立つこと」（文科省, 2008, p.98）、「外国や我が国の生活や文化についての理解を深めるとともに、言語や文化に対する関心を高め、これらを尊重する態度を育てるのに役立つこと」（文科省, 2008, p.98）と示しているが、具体的にどのような言語活動が効果的な学習になるかは記載がされていない。また、田近（2015）は、「絵本や歌やチャンツを導入し、物語や劇を英語で導入することによって、子どもたちはことばの豊かさに触れることができる」（p. 9）と、意

1) 船田まなみ 東京未来大学こども心理学部
2) 執行 智子 東京未来大学こども心理学部
3) カレイラ松崎順子 東京経済大学現代法学部

miyamana1205@gmail.com
shigyo-tomoko@tokyomirai.jp
junko4@hawaii.edu

識して芸術的要素も授業に取り入れていく必要があるとしている。また、英語劇の有効性について、佐野（1990）では英語劇を取り入れることで質の良い言語活動になるとしている。さらに、Calabresa and Rampone（2007）は言語学習の際、内容学習は欠かせないと述べている。

よって、本稿では、英語学習に必要とされてきた英語劇に歌やチャンツを盛り込み、さらに劇の内容を深めるために調べ学習を組み込み開発した「歌と語りでつづる英語劇」を中学校3年間を通して行うことで、参加者のことばの気づきや取り組みにどのような影響を与えたかを参加者の振り返りシートおよび3年間の「歌と語りでつづる英語劇」を通しての評価に関する事後アンケートをもって論じていく。

2. 先行研究

2.1 英語劇・ドラマ教育

田近（2015）は「ことばは思考や概念形成のための大切なツール」（p.9）であり、ことばを豊かにしていくためには意識的に歌やチャンツや劇を扱うことが必要だとしている。

佐野（1990）では、台本を覚えて「観客を前にした上演」（p.18）することを目的とした活動である英語劇は積極的にコミュニケーションをしようとする態度を養うためのすぐれた言語活動であるとしている。言語的な面では、具体的に、英語劇の活動を取り入れることで、「自然な会話のスピードや英語のリズムにも慣れ」（佐野, 1990, p.12）、「非言語的手段と結び付けて英語を理解し表現」（佐野, 1990, pp.12-13）できるようになるなどを挙げている。また、心理的な面では、「人前で英語を話すことに対する心理的抵抗が弱まり、自分の英語の誤りを気にしすぎることがなくなり、また友好的態度で相手に接し、話の概要を聞き取り言外の意味をくみ取る能力も高くなる」（佐野, 1990, p.11）としている。さらに、「場面や文脈の中で言語機能を正しく理解し、適切に表現する力を伸ばす」（佐野, 1990, p.13）ことができたり、生徒に「英語学習の目的意識と成功感を与え」（佐

野, 1990, p.14）たりしすることを挙げ、英語劇の多様な効果があることを報告している。

井村（2004）では、中学生対象にドラマ活動（英語劇）を取り入れたところ、参加者である生徒の多くが、ドラマ活動は発音やイントネーションに効果があったと答えたと報告している。しかし具体的に、どのような活動が発音やイントネーションに効果をもたらしたのか詳細には記載されていない。Maley and Duff（1982）では、英語では、話し手の感情はイントネーションで大半が伝わるので、学習者はイントネーションをそれを引き起こす感情と結びつけて考えることは大切であるとしている。米田（2008）では、小学生対象に英語劇を通してコミュニケーション活動をすることで、児童の英語への意欲が高まったり、英語劇学習後も英語の授業内でセリフに似た表現が出てくると児童たちが敏感に反応するようになったと報告している。

松倉（1999）では、「映画英語はネイティブが日常話している英語そのもの」（p.50）であるため、映画は「ネイティブがナチュラルスピードで話す際の音声のメカニズムや特徴を踏まえて、出来る限りネイティブの発音と同じ発音ができるようにトレーニング」（p.50）することができる題材であるとしている。また、Ryan（2013）では、オーセンティックな教材を導入することは、学習者が現実世界に向き合うだろう、もしくはすでに向き合っている事柄を映し出したりするので、飽きずに学習ができるとしている。

以上のことから、英語劇を導入し、その題材として映画を用いることで、英語の発音やコミュニケーション能力、さらに学習意欲を高めることができるといえるであろう。

2.2 背景知識の学習と言語学習

Calabresa and Rampone（2007）は、言葉と内容を関連付けて学ぶことは、間接的な言語学習の機会を多く提供することになり、言語および内容についての学習へのモチベーションを高めたり、学習内容の理解を深めたりすると言及している。長岡・内田

(2008) は、背景知識がないために英文を日本語に訳しても理解することができない生徒が多いことから、高校生対象に英文を読む前に背景知識を学ぶ「世界史→英語」クラスと背景知識を学ばずに英文を読む「英語→世界史」クラスを比較し、背景知識がどのような働きをしているのか、生徒の意識の変化を検証した。生徒は授業後の内容理解のアンケートと教科書の文中で指定した語句の説明をするライティングの活動を行った。アンケートの結果から「英語→世界史」のクラスは、内容理解したと答えた生徒は少なく、「世界史→英語」のクラスは内容を理解したと答えた生徒が多かった。「自然に世界史での知識が英語の時にできて、いつもよりかなり理解しやすかった」、「世界史の授業の後に同じ時代について英語で読んだのでいつもよりわかりやすかった」、「違う教科でもそれぞれの知識がより理解を深めるのだと思った」(長岡・内田, 2008, p. 5) など、英文を読む際の背景知識の重要性を示す答えがあった。また、語句についての説明では「英語→世界史」のクラスは、ほとんど手をつけなかったが、「世界史→英語」のクラスは、「世界史の授業で得た知識を生かし」(長岡・内田, 2008, p. 6) で説明ができ、さらに「such as ~」や「For example ~」と例を挙げる」(長岡・内田, 2008, p. 6) 回答があった。この結果から背景知識は内容の理解を深め、アウトプットを促進するのにも役に立つと言える。以上のことから、英語劇はイントネーションやリズムを気づかせたり、背景知識を組み込むことで、内容を深く理解させる活動であることがわかる。

3. 本研究

3.1 目的

本研究では、歌やチャンツを盛り込んだ「歌と語りでつづる英語劇」を中学校3年間通して繰り返し行い、さらに歴史的背景の調べ学習を取り入れ、参加者の振り返りシートおよび事後アンケートからそれぞれの学年において、それが生徒のことばへの気づきや学年による異なる活動への取り組みにどのよ

うな影響や変化をもたらすかを調査していくことを目的にする。

本研究では、以下をリサーチクエスションとする。

- (1) 「歌と語りでつづる英語劇」の活動において、参加者はどのような気づきがあり、3年間繰り返し行うことが参加者の気づきにどのような変化をもたらすだろうか。
- (2) 参加者は3年間行ってきた「歌と語りでつづる英語劇」をどのように感じるだろうか。

3.2 参加者

参加者が在籍する中学校は、東京の中高一貫校で、英語科の授業は、音声によるコミュニケーションを重要視し、英語の音やリズムを自然に身につけることを念頭に授業を組み立てられている。特に、中学1年生では、小学校で経験してきた外国語活動とのスムーズな接続を考慮し、入学時から歌やチャンツが多く取り入れられている。英語の授業は、1週間に6時間設けられており、そのうち4時間をテキストを活用した4技能統合型の、残りの2時間で音声によるコミュニケーション活動を中心に行われている。中学生全員による「歌と語りでつづる英語劇」は毎年秋の学園祭にて上演されている。本研究は2013年度から2015年度の3年間を中学1年、2年、3年に在籍し継続的に「歌と語りでつづる英語劇」に参加した12名を参加者とする。参加者は、附属小学校からの入学者が6名、外部からの入学者が6名で構成されている。

3.3 「歌と語りでつづる英語劇」の内容

● 題材

「歌と語りでつづる英語劇」の題材は、ロバート・ワイズ監督によって1965年に製作されたミュージカル映画 *The Sound of Music* から取り上げられ、「歌と語りでつづる英語劇」を研究対象校の筆者のうち2名を含む英語科中学校担当教員によって作成された。映画 *The Sound of Music* を題材に選択した理由は、画像と音声が伴っており、挿入歌が親しみや

すく有名であり、さらに役者が話す英語が標準的で聞きやすいからである。「歌と語りでつづる英語劇」は、歌と語りの部分と歴史的背景の発表部分から構成される。

● 各学年の役割

「歌と語りでつづる英語劇」は中学校に在籍するすべての生徒がそれぞれの学年の成長に即した役割をもって参加することを目的としている。それぞれの役割は以下のとおりである。

・ 中学1年生

学校での英語学習開始から間がないため、3曲 (*Do-Re-Mi*、*Edelweiss*、*Climb Every Mountain*) を歌う。

・ 中学2年生

歌と語りのほとんどの部分を担当する。各々1曲ずつ担当し音声の変化などを研究し、どのように歌うかを指導する役割を担う。

・ 中学3年生

2年間の経験を活かし歌と語りの部分では中学1・2年生のサポートをする役割を担う。また、歴史的背景を調べ、原稿を作成し、劇中に英語で発表する役割を担う。

● シーンと曲選択・スクリプト

曲選択は2013年度（作成時）に中学3年生が映画 *The Sound of Music* を観賞し、担当教員とともに話し合い、選出した。2013年度以降概ね選曲は変わっていない。

スクリプトは、選ばれた曲を基に筆者のうち2名を含む中学校英語科教員が書いた。

● 配役

主に中学2年生が担当する。希望する役のセリフを練習し、教員の前で披露し、合格になると配役が決まる。

● 演出

「歌と語りでつづる英語劇」は普段の英語学習の一部であるため、限られた時間を練習に割り当てていること、また英語に重点を置いていることから、小道具のみを準備した。

● 導入・練習・発表・振り返り

「歌と語りでつづる英語劇」の発表は10月の中旬にある学園祭にて下の図1の流れで行われている。



図1 「歌と語りでつづる英語劇」の流れ

毎年、参加者は1学期末に映画 *The Sound of Music* を鑑賞し、社会科の教員から歴史的背景について学んだ。2学期から発表の本格的な練習が開始する。中学1年生では歌の練習が、中学2年生では歌の練習と同時にセリフとナレーションの練習が始まる。中学3年生は、社会科の教員から学習したことから自分の興味がある部分を選択し、インターネットや本での調べ学習を行い、時代背景の発表のための原稿および発表時に使用するパワーポイントを作成する。また、週に1度（合計5、6回）全体練習にて歌の練習を行う。

リハーサルは発表前日に設けられ、発表は2日間ある学園祭に、1回ずつ公演をする。発表後は録画した発表を鑑賞し、参加者それぞれが振り返りシートに記入する。

3.4 データ収集と分析方法

2013年に中学に入学し、2015年までに「歌と語りでつづる英語劇」を3年間を通して経験した参加者の変化を調査するため、参加者が中学1年から中学

3年の毎年3年間、発表後に記入した振り返りシートと、中学3年の同時期に記入した事後アンケートを分析した。振り返りシートの項目は以下の通りである。

・振り返りシート

「英語について気付いたこと」

「発表について気付いたこと」自由記述

中学3年次に実施した事後アンケートは以下の通りである。

・3年間の「歌と語りでつづる英語劇」を通しての評価に関する事後アンケート

「『歌と語りでつづる英語劇』は楽しかったか」

「『歌と語りでつづる英語劇』はやりがいがあったか」

「『歌と語りでつづる英語劇』は自信がついたか」

「『歌と語りでつづる英語劇』は満足感が持てたか」

について4件法（4あてはまる、3少しあてはまる、2あまりあてはまらない、1あてはまらない）で答えた。さらに質問「参加して良かった理由」に自由記述で答えた。振り返りシートは質的に、事後アンケートは量と質的に分析をした。

3.5 参加者の振り返りシートの結果

3.5.1 振り返りシート

参加者の振り返りシートから以下が抽出された。

● 中学1年（2013年）

- ・物語の内容から楽しくまたは暗く歌う工夫をした（7名）

「*Edelweiss*では悲しみながら祖国を永遠に思っているように歌った。」

- ・歌う時に英語の発音で気付いたこと（6名）

「シの音をティという発音に注意した」

- ・上級生の取り組みへの気づき（4名）

「2、3年生は大きな声でセリフを言い、発音がきれいだっただ」

- ・歌う時に協力できた（3名）

- ・歌うことで達成感を得た（1名）

● 中学2年

- ・セリフをいう時に英語の発音に気をつけた（12名）
「強弱に気を付ける、イントネーションに気をつけた」

- ・練習に積極的に取り組んだ（12名）

「チャンツは難しかったのでお昼の時間や本番前までみんなで積極的に練習していた」

- ・セリフを言う時に協力できた（12名）

「分からないところは友達に聞き、自分も分からない人に教えることができていた」

- ・歌う時に英語の発音に気をつけた（8名）

「つなげる音やアクセントに気をつけた」

- ・自己評価における表現（6名）

「アクセントや区切る部分を失敗してしまった。もう少し感情込めて発音できたのかと思う。」

- ・歌う時に工夫した（3名）

「リズムを大切にしながら、聞いている側に歌詞を分かってもらえるように歌った」

- ・歌を歌う時に発声に気をつけた（2名）

- ・セリフを言う時に英語の発声に気をつけた（2名）

- ・セリフを言う時に工夫した（2名）

「映画で見たキャプテンの感情を込められるように心がけた」

- ・歌を歌う時に協力した（1名）

● 中学3年

(1) 歌と語りの部分

- ・歌う時に気をつけた（3名）

(2) 歴史的背景の発表部分

- ・発表者の態度（8名）

発表の時にeye-contactに気をつけた。

- ・気付いたこと（4名）

調べることによって、

「本番では自分の発言している意味を分かりながら発表することができ、発表するときに感情をこめて発表できた。」

- ・もっと発表したかった（2名）

スライドの作成（1名）

「パワーポイントでは見ている人が理解できるよう

に内容を絵にしたので、少しでもわかりやすくなったのではないか」

次に歴史的背景の発表のための調べ学習について気付いたことである。

(1) 情報収集について

- ・苦勞した (1名)
- ・気付いたこと (1名)
- ・工夫した (1名)

「最初の段階でたくさんの情報の中から、実際に発表する情報を選ぶという作業をした。情報を自分で選択し、必要なかどうかを考える作業は難しくとまどった。聞いてくださる方々の立場となって言葉を選んだり、文章を構成した。」

(2) 原稿を書く作業について

- ・工夫した (4名)

「スクリプトが出来上がってから何度も話し合いをした」

- ・苦勞した (3名)

「一つのことを伝えるにも様々な伝え方、言い回しがあり、どれが一番適しているのかを考えるのに苦勞した」

- ・協力できた (1名)

3.5.2 3年間の「歌と語りでつづる英語劇」を通しての評価に関する事後アンケート結果 (図2)

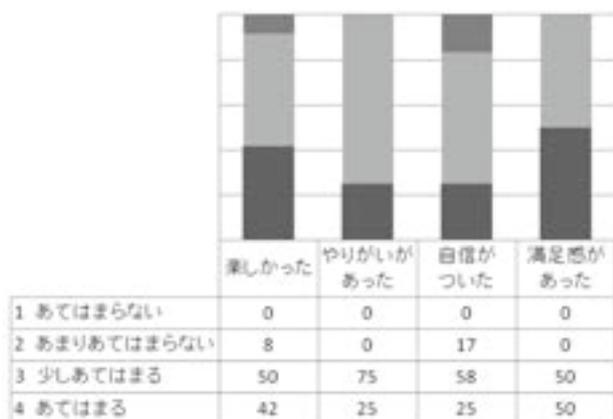


図2 事後アンケート結果 (%)

図2から分かるように、概ねどの項目においても9割以上があてはまる、少しあてはまると回答し、多

くの参加者が「歌と語りでつづる英語劇」を肯定的に捉えている。参加者の「参加して良かった理由」について答えた自由記述では、以下の点が挙げられていた。

- ・自信につながった (3名)
「普段の授業内のプレゼンテーションに自信がついた」

- ・発音が上達した (3名)
「3年目になり、発音もとても良くなったと感じる」

- ・難しさの克服・達成感 (2名)
「『歌と語りでつづる英語劇』に参加して苦手な英語を少しでも分かるようになり、また発音も分かるようになったと思う」

- ・責任感の向上につながった (2名)
「3年間で違った役割ができ、1年生のころに比べるとセリフも長くなり、責任感がついた」

- ・発表の能力が上がった (2名)
「英語力だけでなく発表の仕方や抑揚のつけ方などを学べた」

- ・協力することの大切さを知った (2名)
「『歌と語りでつづる英語劇』がなかったら、中学生同士で協力することがなかった」

- ・面白さを知った (1名)
「一語一語区切って発音するのではなく、つなげたり、イントネーションを知り、英語の歌の面白さを知った」

- ・背景知識が増えた (1名)
「3年間やることで内容も頭に入り、3年目に歴史的背景の発表で自分で調べたり、文を作ったりしたことで、さらによく理解できた」

- ・成長に合わせた役割 (1名)
「1年目は歌、2年目は役、3年目はバックグラウンドと段階を踏んでいるのも良かった」

4. 考察

4.1 リサーチクエスチョン (1)

「『歌と語りでつづる英語劇』の活動において、参加者はどのような気づきがあり、3年間繰り返し行

うことが参加者の気づきにどのような変化をもたらすだろうか」

・歌と語りの部分について

中学1年生の振り返りシートからは、歌の内容に関しての記述が一番多く、次に発音に関しての記述が多くみられた。「Edelweissでは悲しみながら祖国を永遠に思っているように歌った」など、歌う時に物語の内容から楽しくまたは暗く歌う工夫をした参加者が多いことがわかる。多くの参加者は曲に込められた思いを考えながら歌ったようである。次に多かった回答の発音については、「シの音をティという発音に注意した」という回答以外にも、「2、3年生は大きな声でセリフを言い、発音がきれいだった」など、上級生の発表を見て気付いたことにも記述があった。佐野（1990）は、場面や文脈を正しく理解することが表現する際にも影響があるとしている。つまりは、参加者の歌の内容や発音についての記述が多かったのは、参加者がどの場面で歌われている曲か物語の場面や流れを正しく理解したうえで、どのように発音するかという表現にまでも考えが至った結果だと思われる。これは中学2年生の振り返りシートからも同様な傾向が見られた。

中学2年生では、歌う際の発音についてに加え、セリフやナレーションを言う際の英語の発音についての記述が全員からみられた。井村（2004）の研究でドラマ活動が発音やイントネーションへの気づきを与えたように、「歌と語りでつづる英語劇」でも参加者は「強弱に気を付ける、イントネーションに気を付けた」など、イントネーションに注目している傾向がみられる。Maley and Duff（1982）では、イントネーションと話し手の感情は結びついているとしているように、参加者がイントネーションに注目したことは、「この人物はどのような気持ちだったのか」と考えたことが推測できる。実際にセリフを言う際に工夫したことで「映画で見たキャプテンの感情を込められるように心がけた」と記述した参加者もあり、物語の内容を理解したことが表現の仕方に影響を与えている（佐野、1990）のだろう。また、全員が記

述していることは、「積極的に練習に取り組んだ」、「協力できた」ということである。映画英語は英語の発音を練習するための教材として優れている（松倉、1999）ので、参加者は積極的に練習に取り組めたと言える。また、Ryan（2013）では、映画というオーセンティックな教材を取り上げることの利点を述べているように、オーセンティックな教材を導入することで参加者は飽きずに学習ができ、学習意欲を高くおくことができ、積極的に取り組めたのだろう。

中学3年生でも発音についての記述はあったものの、歌と語りの部分についての記述は少なく、歴史的背景の発表についての記述の方が多かった。参加者にとって、歴史的背景の発表の方がより印象に残った活動だったと言えるだろう。

3年間繰り返し行うことで、歌う際の発音について気づきが毎年異なっている。中学1年生では英語の単音に注目し、日本語でいう音階の「シ (/shi/)」を英語の「Ti (/ti/)」ということに気づき、「シの音をティという」という記述がある。中学2年生になると、参加者は音の連結やアクセント、リズムやイントネーションについて述べており、英語を意味のかたまりとして認識している。また発声の仕方についての視点が加わっている。中学3年生になると、発音について以外に、歌う姿勢についての記述が出てきていた。

・発表の部分について

中学3年生はすでに2年間「歌と語りでつづる英語劇」を経験したこともあり、3年目には歴史的背景を調べ、英語の原稿作り、スライドを作成し、発表するという活動を取り入れた。歴史的背景の発表の際には、多くの参加者がeye-contactなど発表者の態度について記述し、多くの参加者が観客を意識していることが分かった。次に多くみられた記述は歴史的背景の調べ学習についてである。

歴史的背景の発表のための調べ学習の際について「最初の段階でたくさんの情報の中から、実際に発表する情報を選ぶという作業をした。情報を自分で選択し、必要なかどうかを考える作業は難しくと

まどった。聞いてくださる方々の立場となって言葉を選んだり、文章を構成した」など情報収集、選択、文の構成、表現まで参加者が試行錯誤しながら取り組んだことが記述されている。

長岡・内田（2008）は背景知識は内容理解を深め、アウトプットを促進するのに役立つことが分かったと背景知識の重要性を述べている。参加者は調べ学習をしたあとに、発表原稿を書くことになっており、発表原稿を書く作業では、参加者同士で何度も話し合いを設け、より聞き手に分かりやすいように考えたという記述があった。歴史的背景を知ること、物語の内容を参加者自身が深く理解していることで、発表の原稿を書くアウトプットの際に、分かりやすい語を選択できたり、聞き手に理解できる文の構成を考えることができたと言える。

さらに、参加者たちは、調べ学習をしたことで「本番では自分の発言している意味を分かりながら発表することができた」、「発表するときの感情の持ち方だったり、意味を考えることができた」など、歴史的背景を調べることで知識が増え、役への気持ちの入れ方に影響を与えた。背景知識はライティングだけでなく、スピーキングの方にも影響を与えたといえるだろう。

4.2 リサーチクエスト (2)

「参加者は3年間行ってきた『歌と語りでつづる英語劇』をどのように感じるだろうか」

参加者が書いた3年間の「歌と語りでつづる英語劇」を通しての評価に関する事後アンケート結果 (図2) より、参加者たちは、「歌と語りでつづる英語劇」を概ね肯定的に受け止めたと言えるであろう。その理由としては、言語的な面と心理的な面での満足感・達成感があったからといえる。

参加者は「歌と語りでつづる英語劇」という言語活動を通して、「The Sound of Musicに参加して苦手な英語を少しでも分かるようになり、また発音も分かるようになった」、「英語力だけでなく発表の仕方や抑揚のつけ方などを学べた」、「一語一語区切っ

て発音するのではなく、つなげたり、イントネーションを知り、英語の歌の面白さを知った」、「3年目になり、発音もとても良くなったと感じる」など、参加者は英語の面での上達を実感したようであり、「歌と語りでつづる英語劇」はすぐれた言語活動 (佐野、1990) であったと言えるのではないだろうか。

参加者は心理的な面でも大きな変化を感じたと記述している。「普段の授業内のプレゼンテーションに自信がついた」、「3年間で違った役割ができ、1年生のころに比べるとセリフも長くなり、責任感がついた」、「『歌と語りでつづる英語劇』がなかったら、中学生同士で協力することがなかった」と述べている。佐野 (1990) で、英語劇は「英語学習の目的意識と成功感を与える」(p.14) と明記しているように、「歌と語りでつづる英語劇」は学習目標が分かりやすく、発表に向けて参加者全員で協力するということが、多くの参加者に達成感や成功感を与えるものになったように思われる。さらに中学3年生では調べ学習を導入し背景知識を膨らませる活動が言葉と内容を関連付けて、学習内容の理解を深めたり、参加者の学習への意欲を高めた (Calabresa and Rampone, 2007) ことで、目的意識を持たせることになったと言えるだろう。また、「3年間やることで内容も頭に入り、3年目に歴史背景の発表で自分で調べたり、文を作ったりしたことで、さらによく理解できた」、「1年目は歌、2年目は役、3年目はバックグラウンドと段階を踏んでいるのも良かった」など、3年間を通して「歌と語りでつづる英語劇」を行ったことが理解を深めたという記述もあった。以上のことから、「歌と語りでつづる英語劇」は、参加者の成長に合わせた活動を3年間積み重ね行ったことが、発音に関しての気づき、深い内容理解、自信や達成感へとつながったと言える。

5. おわりに

本研究では、「歌と語りでつづる英語劇」を取り入れることで、参加者のことばへの気づきや取り組みにどのような影響を与えたかを調査した。3年間

「歌と語りでつづる英語劇」を行ってきた参加者の事後アンケート結果より、学年ごとに気づきが異なることが分かり、継続することの意義を認識する結果になった。しかし、研究対象校では中学1年生の4月から英語のリズムや音について触れていたこともあり、実際に「歌と語りでつづる英語劇」自体がことばへの気づきのきっかけになっているかは定かではない。しかしながら、「歌と語りでつづる英語劇」の際に、リズムや音に多く触れ、意識して取り組んだ参加者が多かったのは確かである。また、本研究から英語を学ぶだけでなく、背景知識を持つことが発表に大きく影響していたということもわかった。

田近(2015)で「ことばの豊かさに触れることができる(p.9)」と述べているように、「歌と語りでつづる英語劇」の活動が、オーセンティックな英語に触れたり、歴史的背景の知識を深めたりすることにつながったといえるだろう。またそのようなオーセンティックなものに触れることも人間形成には大切なことだと感じる。

参考文献

- Calabrese, I. and Rampone, S. (2007) .
Cross-Curricular Resources for Young Learners.
Oxford : Oxford University Press
- Maley, A. and Duff, A. (1982) . *Drama techniques in language learning : a resource book of communication activities for language teachers*.
Cambridge; New York : Cambridge University Press
- Ryan, Jack. (2013) . "Authentic Materials in an EFL Curriculum: Appropriateness, Selection, Activity" *Shizuoka University of Art and Culture bulletin* 14号
- pp.15-20 Retrieved September 3, 2017, from <http://ci.nii.ac.jp/els/contents110009732876.pdf?id=ART0010223674>
- 井村哲也.(2004).「英語ドラマ活動は、中学生の英語習得・英語学習にどのような影響を与えるのか」『英検研究助成報告書』 Retrieved September 3, 2017, from http://www.eiken.or.jp/center_for_research/pdf/bulletin/voll16/vol_16_p197-p210.pdf
- 佐野正之.(1990).『英語劇指導マニュアル』玉川大学出版部
- 田近裕子.(2015).「第一章 外国語学習とは」『生きる力を育む初等英語教育－津田塾大学からの提言－』朝日出版社
- 長岡将之・内田三和.(2008).『他教科と連携した授業実践のあり方について～英語と世界史のコラボレーション授業～』群馬県総合教育センター
Retrieved September 3, 2017, from http://www.nc.center.gsn.ed.jp/?action=common_download_main&upload_id=4910
- 松倉信幸.(1999).「映画英語による英語教育のストラテジー」『鈴鹿国際大学短期大学部紀要』19号 pp.49-56. Retrieved September 3, 2017, from <http://ci.nii.ac.jp/naid/110007042315>
- 文部科学省.(2008).中学校学習指導要領外国語.
Retrieved September 3, 2017, from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chu/gai.htm
- 米田佐紀子.(2008).「英語劇を通して日本人児童に英語力を定着させる試み—コミュニケーション能力からみた発音・語彙・文型の定着を目指して—」『北陸学院短期大学紀要』40号 pp.65-84
Retrieved September 3, 2017, from <http://iss.ndl.go.jp/books/R100000002-I000000021964-0>
- (ふなた まなみ・しぎょう ともこ・かれいら
まつざき じゅんこ)

【受理日 2017年10月25日】